

〔翻刻〕

# 富山県立図書館蔵 山田孝雄著『萬葉集研究の意義と順序』翻刻

(前半)

鈴木道代

## 要旨

本稿は、富山県立図書館山田孝雄文庫蔵、山田孝雄による『萬葉集研究の意義と順序』と題された未発表自筆原稿の翻刻である。本原稿の執筆年代は不明であるが、『校本萬葉集』一（岩波書店、一九三一年刊行）の引用があることにより、一九三一年以降執筆されたことが明らかとなっている（富山県立図書館『山田孝雄文庫 原稿書誌詳細』）。山田の萬葉集研究に関する業績は、注釈書や文法書など幅広いが、中でも本稿は、特に萬葉集研究の意義と萬葉仮名の訓義について論じたものである。

キーワード：山田孝雄 富山県立図書館 萬葉集 自筆原

## 稿 翻刻

富山県立図書館山田孝雄文庫蔵『萬葉集研究の意義と順序』は、山田孝雄（一八七五～一九五八）が一九三一年以降に執筆した『萬葉集』に関する研究の意義と萬葉仮名の訓義について論じた、自筆原稿である。翻刻にあたっての凡例は以下の通りである。

### 凡 例

一、翻刻の底本は、富山県立図書館山田孝雄文庫蔵『萬葉集研究の意義と順序』（同文庫書誌ID 1001483096）の原稿である。

一、漢字は底本に近い字体を用い、旧字体および異体字は、

極力そのまま翻刻した。再現できないものについては、一部印刷標準体を用いた箇所がある。

一、原稿上の文字の削除については二重棒線で示し、文字の挿入については【】で示した。

一、漢字のルビは、底本通りに示した。

一、判別できない文字は<sup>(不明)</sup>■とした。

一、句読点は基本的に底本のママにしているが、判別が困難な箇所については、適宜付した箇所がある。

一、〈〉は、翻刻者による注記である。

一、明らかに原稿の綴じ方に誤りがある場合、私的に直した。

#### 翻刻本文

##### 一、萬葉集研究の意義と順序

〔欄外〕萬葉集研究の意義と順序Ⅱ研究の才一歩としての文字の取扱

萬葉集の研究は今や時代の流行の如くなれ

り。然れどもそが流行すると否とに閑せず、こ

の書の研究は卓然としてわが学界に重大なる

意義を有するものなり。然らばその萬葉集研

究の意義如何。

萬葉集を研究するものは、人各【によりそれ〴〵】その

目的を異

にすべくして、すべてこれを一二の要点に概括

しうべきにあらざるけれども、これを眞の学

術上の意義如何といふ點によりて見れば、少く

も二の主眼點【要存する】点ありと見ゆ。一は古典とし

て研究するものにして、他は歌として研究する

ものなり。

古典として研究するものは【と】歌として研究す

るものと必ずしも【は目的一な】らざるが故に、その方法

とそ

の結論も一ならざるべきはもとよりいふをま

たざる所なるが、しかも、萬葉集はわが國の古典

にして、同時に歌集なるが故に、古典として研究

して研究する場合に【それが】歌集たることを忘るべか

らざると共に、歌集として研究する場合にもそ

れが古典たることを忘るべからざるなり。さ

はあれ、古典として研究する場合と、歌集として

研究とはもとより方法も結論も異なることある

べきはもとよといふをまたざるなり。この故に

ここには【先づ】その古典としての場合と歌集として

の場合その研究の意義を区別して説かむとす。

萬葉集を古典として見む場合には、才一にそ

の古典として【の】性質を見ざるべからず。然るに、古典としての性質を見るといふことの前に決しておくべきことは古典とは何ぞやといふこととなり。古典とは文字のままにていへば古き典籍といふことなり。古き典籍といふことは或は古き書籍といふに略同じやうに考へられ易し。然らば古き書籍はすべき【て】古典といふにうべきかといふに、葺【誰】人は【も】直ちに然りといふに

躊躇すべし。然らば古き書籍にあらざるかといふに、もとより古き書籍をいふに相違なし。

果して然りとせば、古典は古き書籍の中のみ【には相違】な

けれども、そのすべてをさすにあらざして、そのうちのあるものをさすは【せり】と考へられざるべからず。果して然らば、その古き典【書】籍中の如何なるものをさすかと考ふべきが、その古き書籍中にも最も年代の古きものをさすかといふに必ずしも然らず。又古き書籍中にも最も稀なるものをさすかといふに必ずしも然らず。或は古き書籍中最も有名なるものをさすかといふに然必ずしも然らず。或は古き書籍中古

代に於いて最も貴まれしものをさすかといふに必ずしも然らず。果して然らば古典とは何なるものなりや。その明かならずば、古典としての萬葉集の性質などは考へうべくもあらざるなり。今先づ古典といふ文字を考ふるに「古」はいふまでもなく、古代の義なるが「典」は普通に書籍の義とすれど、ただの書籍をさすにあらざ。この字は「冊」と「六」とゆ【より】なれる會意

の字にして【その冊を尊んで】「六」上に閣く意あるものなれば、貴重な

る書曲の意なるなり。されは爾雅に「典、經也」（釋言）「典、常也」（釋詁）とあり。されば【て】典は支那にて經

書といふと略同じ字義を有するものなりといふべし。これによりて見れば、古典は先づその字義上、尊重すべき書籍と見るべきものなり。されど、たゞ貴重すべきものなりといふのみでは未だその性質を明かにせりといふべからず。ここに古典とは古代の書籍の中にて特別の意義を有する或る貴重な書籍をさせりといふべきが、その特別の意義をとは何をさすか。

これにつきて論じたるものの一は校本萬葉集（マ）の首巻に説ける古典の説なり。曰はく、

古典といふ事の一般的意義は現代より見て古い時代に作られた文献であるといふ事

であるが「らう」が、更に特殊の意義として、それが文献として權威を認められてゐる事、また現代の教養だけでは理解に困難であり、過去の言語文化の智識がそれを理解するのに極めて必要となつて来る事が、その文献を古典といふものの中に入れる必要なる要素となつて来る。

とあり。この説明果して當を得たりといふべきか。吾人は未だ之に賛成すべしと思はざるなり。この説明にて、その古典をば一方に於いて「文献として權威を認められてゐる事」とせるはもとより不可なき事なれど、その條件のひとして「過去の言語文化の智識がそれを理解するのに極めて必要となつて来る事」とあげたる點は如何なり。この見解は、それが何の權威もなき書にても難解の點多きが故に古典なりといはるべき嫌を導くべく、又この説明にては、その古典の研究が偉大なる發展をなして、若し何等

の難解の點なきに到る時には古典たる性質を減却するに至るべきかの如くに思はしむるなり。吾人の思ふ所は之に異なり。古代【典】は古

代の典籍たるが故に、その言語、その文化の智識の現代人に不十分なるが為に難解の點あるはいふをまたざれど、その難解なることは古典としての偶然性にして本質的の古典の性質にはあらざるなり。古典の權威は難解の為に存するものにあらず、又難解たるものが古典たるの權威を保つ所以にあらずして、それが、古典たる故を以て、偶難解の點ありても吾人は勞苦を辞せずしてこれを研究せむとするものたるや必せり。さればその難解なりといふ事が、古典たるの必然的條件たるものにあらずして、その偶然的事実として難解なりといふに止まるのみ。この故にその難解の點の減少するにつれて、かへりて古典としての價值高まり、又古典の精神はいよく發揮せらるべきものなりと思惟す。かく論じ来れば、古典とは權威ある古代の典籍といふべきに似たるが、その「權威ある」といふ事は漠然たる語にして何事に對しての權威なるかの見解によりて如何にも説明しうべし。

極端なる例をいへば、ここに圍基などの道に權威ある書ありとせよ。これらの古き書籍も亦古典といひて可なるか。現に碁經など名も古より傳はれり。然らば、かくの如き書も古典といふべきか。然り。その如き書はその道にとりては古典といふに妨げなし。されど、さる碁經の如きものを以て一般に古典なりと認むる事は決してあらざるなり。されば、古典といふにはなほ別に一定の限界あるべし。而してその限界は日本の古典支那の古典、西洋の古典などいふに、その国土民族等を以て限界とするものあり。又儒教の古典、佛教の古典などいふやうにその道によりての限界を以てするものあり。今、われらの古典といふものは、民族的にいへば、日本の古典なるべきこといふまでもなきが、その道の方面よりいへば、佛教にもあらず、儒教にもあらずるは明かなり。然らば、佛教儒教を全く【排】除外すべきかといふに、必ずしも然らず。果して然らば、われらの古典といふは何をさすか。上に古典の字典は經字と同義なりといへり。支那にて經といふは「道義法制

〔欄外〕「道之常」(左傳昭二十五注)  
「經徑也如徑路無所不通可常用也」(釈名)

の思ふべからざる者」(辭字)をさすといふは一般の通説なり。これによりて吾人の古典の意義をも解しうべし。吾人は【が】古典といふは

吾が氏族の經常(即ち古今不易)の精神を徴するに足る權威を有する古代の文獻

をさすなり。この点に於いて合格せるものはその著述の古今を論ぜずして可なるもべきものなれど、今の世の著述の未だ權威を認められざるものは、これを「典」と称する資格を有せざるが故に、これを加ふるを得ざるべし。されど、五十年百年にして既に經典としての權威を認められたるものは古典として固より差支なきものなり。そが中にも特に古き時代のものを重しとする所以は、それが單に昔年代の古きが為にいふにあらず。況んや難解なりなどいふことは才二才三の問題にして、決して主要なる性質にあらざるなり。抑も昔【年】代の最も古きものを次て古典の中にも最も重んずべしとするは【單にそれが古しといふによるにあらずして】、実に

それが古代よりの民族の精神既にかくの如しといふことを徹する資料として貴重すべく、古代よりの民族の精神を徹するには最才一にこれによらざるべからざるが故に、これを最も尊重するものなりとす。されば、難解を以て古典の才一條件とするが如きは古典の眞義を解せざるものといふべきなり【も不可な】きなり。

然れど

古典はもとより古代の言語文字畧を以て古代の文化と思想とを記載したるものなれば、これによりて傳はれる精神を知らむには先づ、その文字言語その文化に精通せざるべからざるが故に、その手段として先づ、これらを研究せざるべからざるはいふまでもなし。されど、これらは実にその手段にして目的にあらざるをくれくれも忘るべからず。

吾人が、わが国の古典として最も重んずべきもの如何と考ふる中に、古事記、日本紀の二書を最とすべし。而してこれにつぐものは萬葉集なりとす。ここに吾人は萬葉集を古典として研究することの目的を明かに認めるべきなり。即ち古典として萬葉集を見むものは先づ、その

言語を知り、その文化を知り、而してわれらの祖先の精神生活を知り、よりて以てわれら民族の不易恒常の精神を知らむとすることにありとす。この精神生活を知らむとすることを除かば、古典の研究はただ一の遊戯に止まるべきなり。萬葉集を古典として研究する場合の主眼点ここに存す。

〔次の「の精神的」を除き、三十七字内容重複する〕の精神的の遊戯に止まるべきなり。萬葉集を古典として研究する場合の主眼点ここに存す。

然れども、萬葉集を古典として研究する目的は單にこれのみに止まらず。そは何ぞといふて、他の古典即ち古事記、日本紀に照して考ふるに、日本紀は記事豊富なれど、文章は漢文なれば、古語を知らむ易がとてはたより少きものなり。古事記は國語を傳へむとして記したるものなれど、世遷りてその正しきよみ方を明かにし難き点少からず。萬葉集ももとより【すべて】古語を如実に傳へたりといふべきにあらねど、他の二典に比すれば、古語の明かにせらるべき分量遙に多く、又【古代の】文化を知らむ料として豊富なる内容を有す。この故に、他の二典を研究する場合

に於いて、その言語、又文化現象をこの萬葉集に  
徴してはじめて明かにしうべき点少からざる

なり。されば、萬葉集はそれ自身が古典研究の  
曲的物【対象】となりうべきのみならず、他の古典の研  
究の基礎となるべき点少からず。即ちこの研

究によりて得たる結果を以て、他の紀記等の古  
典【と】相照して以て古代の精神生活はた、われら  
民族の恒常不易の精神生活を知るを得べきなり。

次に萬葉集を歌集として研究するもの【こと】につ

きては、いふまでもなく一般の歌集を取扱ふと  
同じ精神に出で、或は歌体の研究或は歌人の生

活或は【當時の】歌の性質或は歌謡史上の觀察或は修辭

学の觀察等或は一般文藝の学理よりの觀察等

これ亦多末【多】の方面あるべきはいふをまたず。

かくて上にいへる如く、古典として見る場

合【に】於いても、そが歌【集】なることは忘るべから  
ざ

ると共に歌【集】として見る場合にもそが古典たる

ことを恐るべからざるが、しかも、この二方面の

研究をなさむものにとりて共通して先づ知り、

且つ行はざるべからざる事あり。次に之を述  
べむ。

一般に古代の文献の研究につきては、今人が  
最初に感ずる三の大なる障碍あり。その一は  
その文字が原本のままなりやといふ事なり。

この事の為に汎く原本【の面目】につきての基礎的研究  
を施さざるべからざるなり。その二は古語な  
り。即ち古代の言語は現代の言語と形音の異  
にして意義の【畧】同じきあり、音【畧】同じくして意異  
なり。

な

るあり。又音も義も全く現代に似たるものな  
きあり。かくの如きものを熟知せずば古典は  
解すべきにあらざるなり。次には古代の文化

なり精神生活【外形上】同様の文化現象と見ゆるもの  
にして古今によりて意義異なるあり。外形

上全く異なる文化現象と見にて、その精意義は

今の世にあるものと異ならざるものあり。又

外形意義全く今の世に類なき事あり。これ

らの事を十分に理科せずば、これらを古典とし  
て見むとしても、歌集として見むとしても正當

なる見解を得べき根拠なきものといはざるべ  
からず。

以上は一般に古代の書籍【文献】につきての事なる

が、萬葉集につきてはその上になほ加はれる難

点あり。そは何ぞといふに、それが、すべて漢字に

て記載せられてあるが為に生ずる点なり。先

づオ一の難点はその文字が果して原本のまま

なりや否やといふことなり。現代通用の文字

と頗る体を異にせるもの往々存せることなり。

それらの文字【に】は或は誤れるもあるべく、又誤に

あらずして、古代通用の普通の文字たりしもあ

るべし。【かゝる場合に】その字体の研究を糧にする時は

往々

誤りたる見解を懐くに到る悞あり。オ二の難

点はその文字が如何なる語をあらはせるかと

いふ事なるが、これには字の音によれるあり、又

所謂訓を用ゐたるあり。その字音につきては

吾人が今日知れ【用ゐ】る字音とは頗る趣の異なるも

のたること往々あり。而して之を正當に認む

ることを得ざる時は到底正しく之をよむこと

たに不可能なり。如何に【況んや正しき】理解を得むなど

は思

ひもよらぬ事なりとす。又訓を用ゐず【た】る訓【場合】

に

てはそれが如何なる語をあらはすに【も】のなりや往

々不可解のものあり。これにつきても一字一

語なる場合もあれば二字三字にて一語をあらはせる場合もあれば、これらの二字三字にてのものは漢語として熟したるものを襲用せる

あり、又【ある】國語をあらはさむが為に臨時に漢字を

二三合せて用ゐたるもあるべく、それらの事情

は必ずしも一樣ならざるべければ、之れらをそ

の場合々に應じて正當の判断を下さざるべ

からざるなり。これらの點は本邦の古典一般

に通じたる現象なるが、しかも、他の書は意義の

通ずるのみにて満足すといひても止みぬべき

が、萬葉集にありてはその歌としてのよみ方を

明かにせざる以上は之をよみたりといふを得

べきにあらざれば、さる姑息の手段をとるを許

されざるなり。

以上述ぶる如くなれば、萬葉集の研究にあり

ての研究の順序方法はおのづから明らなると

ころあらむが、次にはその点につきての説明に

うつつらむ。

## 二 萬葉集研究の順序と方法

凡れ一般に文献につきて、それを正當に理解せむとするには、それを創作せる方法と正反對の順序によりて研究を進めざるべからず。た



とへば、ここに一首の歌ありとせむ。この歌が

吾人の目に觸るるに到れることはこれは客觀

的事実にあれど、その基は作者の主觀にはじ

まる。即ち作者が主觀としてある思想を起し、

これを具象して、一定の言語に寓し、更にそれを

文字に託せるものなり。然るに「かくて」讀者はその文

字によりてその言語を考へ、その言語によりて

その思想を考へ以て作者が主觀に「於」いて如何

なる思想を起したり「る」かを考ふるをうるなり。

即ち作者の行へる順序を讀者は逆に進行する

をば、研究の順序とす。この事はある物を帛紗

に包み箱に納め、更にこれに荷造をなして遠方

に送れるとき受取人は、その差出人の行ひしこ

とを反對の順序をとりて先づ荷造を解き「次に」箱を

開き、次に帛紗を去りてはじめて目的の物を手

にするをうると一般なり。而してその荷造

が完全なる時は、内部に故障(不明)らざれど、荷造不

完のときは内部に変状を與ふることなしとせ

ず。ことにその荷造が遠隔の地より多くの人々

の手に(不明)はして来る場合には、その変状と與ふ

べき(不明)「少」とせず。現代人の作品

を味ふ場合に於いても理論上、上の如き順序と

手續とによるものにして、その手續が、順當に行

はれずして往々誤解又は行違を生ずることある

を見る。古典に於いては、その上に更に年月

の経過と共に幾多の人々により傳へられたる

間に起りたる誤の少からざるを見る。この

故に古典にありては往々誤認を生じ易く、又現

に不可解のもの少からず存するを見る。皆上

の如き往々の事情の爲と思はれたるなり。

ここに於いて萬葉集研究はおのづから明か

なるべし。即ちその第一歩は

〈欄外「一」〉 文字を正當に認識すること

なり。その文字を正當に認識すること能はず

ば、それより以後の研究は基礎なきものにして、

折角の研究も、その文字に對する研究の缺陷誤

謬を明かにせられれば、一切無効に歸すべきも

ゆなり。【といはざるべからず。】さればこの文字の正當に

認識することにつきては最も嚴密なる意義にて確實なる

研究を施さざるべからず。

〈欄外「二」〉 さて、その文字は元來國語を記載せむが為

に

用ゐしものなれば、才二段として、その文字によ

りて記載せられたるものを國語としてよむこ

との上に正當なる研究を施さざるべからず。これにつきてはその文字を使用して國語をあらはすに用ゐたる幾多の方式が如何にあらはれたるかを知りて、これを正しく當時の語として復原してよむ方法を正當に講究せざるべからざるものなり。

以上、文字言語についての研究が確立して後  
はじめ、

#### 歌としての読み方ゆ【及】び意義の研究

にうつるべきものなるが、それは文字言語の理解のみに止まらずして、その歌の作者境遇及び當時の常識【作歌の動機】事情等一切を異体的に考へみると共に、當時の文藝の常相を知りて之を理解すると要するものなるが、それ【ら】を眞に理解せむにはその歌を生するに到れる、基

#### 當時の常識の研究

#### 当時の文化

に関する智識を知らざるべからず。

かくの如く、

#### 一、文字言語の理解

#### 二、歌としての理解

#### 三、當時の常識并に文化の理解

の三段階を往べきものなるが、この三階段までは古典として研究するものにとりても【文藝】としての研究をなすものにとりても共通する基礎の研究なるものなり。今若し、その字形につきて認識なく、字音につきての智識もなく、そのよみ方も研究せず、複合字につきても正當なる認識なく、又語の意義の研究もなく又當時の常識如何をも、文化の状態をも顧みずして論を立つるものあらば、吾人はそれらの論は沙上の樓閣なりといはむのみ。若し、その說中れりとすとも、それは偶然の事にして学問的價値ありや否やを疑【は】むとす。

さはあれ、以上の才三までの研究はこれ基礎的研究にしてこれ萬葉集研究の究竟的目的にあらず。必ずこれより出發して、或は古典としての研究或は文藝としての研究の行はるべき筈のものなり。然るに、従来の萬葉集の研究はその目的も必ずしも明かならず。その基礎の如きは殆ど一人も之を明かにしたるものなかりしが如し。故に今之を明かにして諸君の参考の供す。即して、吾が、【従来行ひし】この【書の】講義の目的は

この基礎の研究即ち上述の才三歩までを行はむとするにあり。されは余が講義は「研究の」入門にして研究の目的を「それを基として」それより進んではじめ、各特

色ある研究をなすべきものとす。

〔七〕<sup>(前)</sup> 実地の問題を以てしての

これより実地の問題についての事項を少しく述べむ。

以上述べたる所によりて萬葉【集】研究の順序方

法は【の】才一着手はその底本の問題なり【る】を知るべし。即ち、われらが、それを研究するにあたりて

何の本に據るべきかといふことなり。この問題については、ここに撰者の自筆本、又は撰者當

時の本現在せば、直ちにそれによるべくして、殆ど問題なしといへども、多くの古典に通じて原

本の存在すといふものは殆どなきことなれば、比較的古き本にして比較的誤なき本によるよ

り外に方法なしといふべし。然るに萬葉集にありてはこれも亦望むべからず。ここに止む

を得ず比較的古き本を集めて、それを對校して以てその直しと思はるべきものをとらざるべ

からず。幸にして今日にありては校本萬葉集

の著ありては略、この目的を達せりと見ゆれば、大体に於いてこれを【研究の】基礎とすべきなり。されと校本萬葉集にも誤なきにあらず、又その後に後にも発見せられたる古本あれば、(尼崎本の如き) これらも常に對校すべきなり。

さてかく諸本の異同を對校してもこれにて

目的は達せりといふべからず。何となれば、甲の本にかくあり乙の本にかくあり、丙の本にかくありといふ如く文字返々たるときに、いづれ

によるべきか。かゝる場合に多数決は必ずしも正しきことを示すものにあらず。これで取舍して正しと認むるものをとるは学者の見識

に属す。然れども、その取舍の方針は必ずしも一定せず。これを決定するには汎く、當時一般

の文献に通ずる該博なる知識と當時の文字言語等につきての正當【確】なると學【見】識とを有要する

ものにしてこれの上に缺陷あるときはその判断は往々誤に陥ることあり。然れども箇人においてその学識におのづから限界あれば、よくこれを判断して【常に】正鵠を逸せずといふ人は恐らく

は一人もあらざるべし。されば、ある学者の判

断したるものにて、それに誤あらば、他の学者が正確【妥當】な立脚地よりこれを是正せざるべからず。これは他の学者を攻撃するが目的にあらずして學術の正確を期せむが為に行ふ共同作業の一部分といふべきものなりとす。

さて、又かくの如く種々に苦心してもその文字の正しき【と】認めらるべきものゆ出現を見ざることあり。かかる場合に於いては、止むと得ずここに誤字ありと認めざるべからざることあり。されど、かく誤字ありといふことを盛んにいふ時は古典の研究は殆ど正しく行はるること殆どなくなり、学者の私見を逞しくする舞臺とならむ恐あり。現に萬葉集にても【従来】かゝることの為に幾許かの誤解誤認となして、真の【人】を【解凍】をあまりたること少からず。忠実なる研究態度をとるものはこの誤字説は最少数に限り、止むを得ざる場合に、しかも解説として之を<sup>(不明)</sup>出するに止むる態度をとるを<sup>(不明)</sup>か為りとす。たとへば卷一卷頭の歌の

師告名倍手

我許<sup>(不明)</sup>背【止】齒告目

の如きこれなり。

さて底本の文字の認定を終ふれば、次の問題は文字につきての認識なり。これにつきては

一字一字につきての認識

複合字につきての研究【認識】

の方面あるべして思ふ。その一字一字につきての認識は

一 文字としての研究

二 その文字のよみ方<sup>(不明)</sup>【を國語にあてたる方法】の研究

の二の方面あるべし。かくて、その文字

文字としての研究

は又

一、【その】文字の形の研究

二、その文字の意音の研究

の二の方面ある【り】。今、先づその

一字一字の形の研究

につきて概要をいはむに、その文【字】の形が、現代に用ゐらるるものと全然同じき場合は何事の問題起らざるが如しといへども、若しその字【の】形が、現代に見馴れざるものにてある場合、又その字【の】形が現代に見馴れたるものなりとしてもそのよみ方と意義とが、現代に用ゐるものと異なるも

の少からざるあり。かくの如きものうちに  
は支那にて既に行はれたるものをわが國にて  
援用せるものあり、又わが國にて工夫せるもの  
もあるべし。かくの如くなれど、その造字の方  
式は【国として】支那より行はれたるものに準據せるもの  
なり。今、それらにつきて参考の為に一般的の  
説明をなさむ。

漢字には六朝頃の通用時にして【現代の字と形と異にし  
たるものが】萬葉集の頃

に用ゐたる字体のもの少からず。その二三例  
をあぐ。

○宐 (肉の異体、肉より起る)

誤りて 完 とすること少からず。

致 (殺の異体 教致より起る)

後に 煞 とすることあり。

獮 (獵)

关 (癸 その基 笑といふ字体あり)

古代【木朝】の字には往々扁の「弓」を「方」に作るあり。

𠂔 (引ノ古体)

𠂔 (卷の古字)

六朝の字には往々扁の「弓」を「方」にするあり。

弘 (弘) ○旃旃 (強)

旃 (弥)

「方」扁を「𠂔」に作るあり。

𠂔 (於)

𠂔 (旅)

「𠂔」を「二」に作るあり。

近 (匠) 逕 (匿)

○迳 逕 (匣) ○逃 (篋)

珠逕 (卷三、376) (卷七1240)

玉逕 (卷十一 2678) (卷十二 2884)

「巾」と「巾」と「十」往々通用することあり。

莖—莖

經—經

莖 荒

旁の「爪」を往々「爪」につくることあり。

𠂔 (馴)

𠂔 (釧)

𠂔 (訓)

又

○𠂔 (射、説文に𠂔 二体あり)

往々「𠂔」を「𠂔」とすることあり。

「糠」を米糠とすることあり。「率」を「糲」に作ることあり。

漢字にはその慣用の久しきにつれて、汎き意義のものが、固定して狭き意に用ゐられ、又は汎【狭】き意義のものが、擴張せられて廣き意に用ゐらるること少からず。かゝる時に往【々】その【もの】意義

を【の】固定を未きものをば忘れ、られ、て種々の変形を生ずることあり。たとえば、

丘——山——岳  
采——<sup>オ</sup>採（卷一、第十歌）

岡——山——崗（卷二、第二歌）以下<sup>（不明）</sup>多し

然——火——燃  
巢——木——櫟 莫——日——暮

熏——火——燠 梁——木——樑

以上は、原の字にある部分を再び加へたる例なり。

采——才——採（卷一第一歌）

衰——<sup>オ</sup>——蓑 丘——山——岳（卷一 1 以下

要——月——腰

果——<sup>オ</sup>——菓

瓜——<sup>オ</sup>——瓜

刈——<sup>オ</sup>——刈  
兔——<sup>オ</sup>——菟 縵——<sup>オ</sup>——縵

帚——竹——箒  
矢——竹——笑

云——雨——雲  
七——イ——化

争——言——諍  
咨——言——諮

恚——イ——德  
吝——<sup>オ</sup>——吝

晏——日——晏  
回——<sup>レ</sup>——迴

周——<sup>レ</sup>——週  
尊——木——樽

京——木——椋（卷三椋橋）  
——<sup>レ</sup>——罽 罽——<sup>レ</sup>——罽

（卷九 小椋山）

原——<sup>シ</sup>——源

踞——<sup>シ</sup>——澀——澁

笑——口——咲——咲 エマン花エ

莫——日——燕——鳥——鷓

舞——イ——儷

以上の外に漢字として正當【常】と認められざる  
國語のものまゝ存す。たとへば、

盤 　　を磐の字と同様に用ゐること  
　　を碗の字と同様に用ゐること

これらはその文字は支那に存するものなれど、  
その意本来別のものなり。而してそれらは恐  
らくは支那にて既に用ゐしを<sup>(本地)</sup>用せしならむ。  
盤の字については支那にまさしくその證あり。

「碗」字につきては未だその證を支那の文献に発  
見せねど、なほ支那傳來のものなるべし。又本  
邦にてつくれりと思はるる文字あり。

桉(クラ) (鞍ヲ木ニツクルガ故カ)

杵(ホコ) (銚ヲ木ニツクルガ故カ)

梶(カヂ)

の如きこれなり。

本稿は富山県立図書館山田孝雄文庫の調査結果の一部とな  
ります。富山県立図書館の皆様には、多大なるご協力を賜  
りました。ここに厚く御礼申し上げます。

(すずき・みちよ、創価大学学士課程教育機構

総合学習支援センター特任助教)